



国立大学附属幼稚園からの提案

幼児教育を見つめるための評価



平成19年3月

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

発刊にあたって

国立大学附属幼稚園は、大学と連携をとりながら幼児教育に関わる様々な研究をしております。昨年度、その研究成果の一部をリーフレットとして全国の教育関係者に発信いたしましたところ、様々なご意見をいただき、発信することの意義をとらえることができました。このような研究成果の発信という活動を一過性のものとして終わらせることがないように、本年度もリーフレットを作成し全国へ発信することといたしました。幼児教育のさらなる充実と将来への発展のためにご活用いただければ幸いです。

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

会長 福永 茂

目 次



—国立大学附属幼稚園の取り組み—

幼児教育を見つめるための評価 3

—先進的研究の概要—

保育者の専門性を高める評価を目指して 4

保育内容の再考
—幼稚園教育要領5領域のねらいを視点として— 5

保育の「評価」を考える 6

3つの視点から保育を捉える
～保育に生きるカリキュラム構成と評価～ 7

遊びのなかの学び・再考
—保育実践の評価を通して学びのありようを確かめる— 8

—コラム・今後に向けて—

〈コラム〉 ～子どもの視点に立った評価～ 9

〈今後に向けて〉

国立大学附属幼稚園(49園)平成19年度研究テーマ一覧 10～11

幼児教育を見つめるための評価

各附属幼稚園では、教育の“質”を問い続け、教育課程の改善・充実を図るために、日々の教育活動、教育課程の実施状況や幼児の育ちの状況を的確に評価する取り組みを進めています。また、その結果を公表し、幼児教育の水準の維持・向上に努めております。



〈幼児期の豊かな変容をとらえる評価〉

- ・よりよい保育を創り出すために、一人一人の育ちと集団の育ちの両面から幼児をみつめ、発達課題に即した適切な個の評価の積み重ねを重視しています。
- ・相対評価や到達度評価ではないことに留意しています。
- ・乳幼児期から幼児期、さらには児童期への発達の連続性や新しい教育の方向を視野に入れ、日々の保育の中で『幼児の育つ道筋』を検討しとらえ直しています。

〈教師の指導を振り返る評価〉

- ・教師は長期・短期の指導計画を作成し、その計画に基づいて保育をし、その日の幼児の思いを見取り、教師のかかわり方などについて反省・評価し、これを踏まえた新たな指導計画を作成するという積み重ねを大切にしています。
- ・教師自身の保育観の見直しにつながるような指導過程の省察を大切にしています。
- ・保育の評価は、“具体的なねらいや内容”“環境のあり方”“発達に必要な経験”“適切な援助”などの観点を設けて行っています。
- ・具体的な場面を振り返りながら、幼児の思いや願い、教師のかかわり方、環境構成などについて協議する保育カンファレンスを行っています。

〈幼児理解の共有〉

- ・幼児理解を深めるために、家庭との連携を図っています。家庭生活と園生活の連続性と循環性が活かされるように、また、保護者が園の教育の方針や幼児の発達について理解を深めていくことができるように丁寧にかかわり、幼児の豊かな発達を確保されるよう努めています。
- ・家庭や地域社会の人々に向けて、幼児期の教育や幼児の発達について広く理解が得られるように、ホームページや刊行物、公開研究会などを通して発信しています。

※適切な評価を行なう際の基本となる事項を掲載事例からまとめました。

保育者の専門性を高める評価を目指して

秋田大学教育文化学部附属幼稚園

▼評価を問い直す

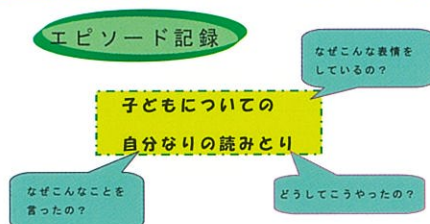
幼稚園での評価は評定尺度を作って幼児が「できた」「できない」と測るものではない。幼児一人一人を理解しその発達を保障すること、保育を省察し、幼児とともにつくる園生活のあり方を見直し幼稚園の教育課程を改善していくためのものと考え。

そのために、園生活における実際の幼児の姿をとらえなおし、保育を具体的に問い直すことに取り組んだ。それは、単に具体的な保育の見直しにとどまらず、保育を支える保育観・教育観・幼児観・発達観の見直し、確認につながると考えるからである。さらにそれは、幼稚園生活のみならず、子どもの成長・発達過程を見通した中での「幼児期にふさわしい生活」の意味の問い直しであり、確認ともなるだろう。

▼園生活における実際の幼児の姿をとらえなおし、保育を具体的に問い直すために～エピソード記録

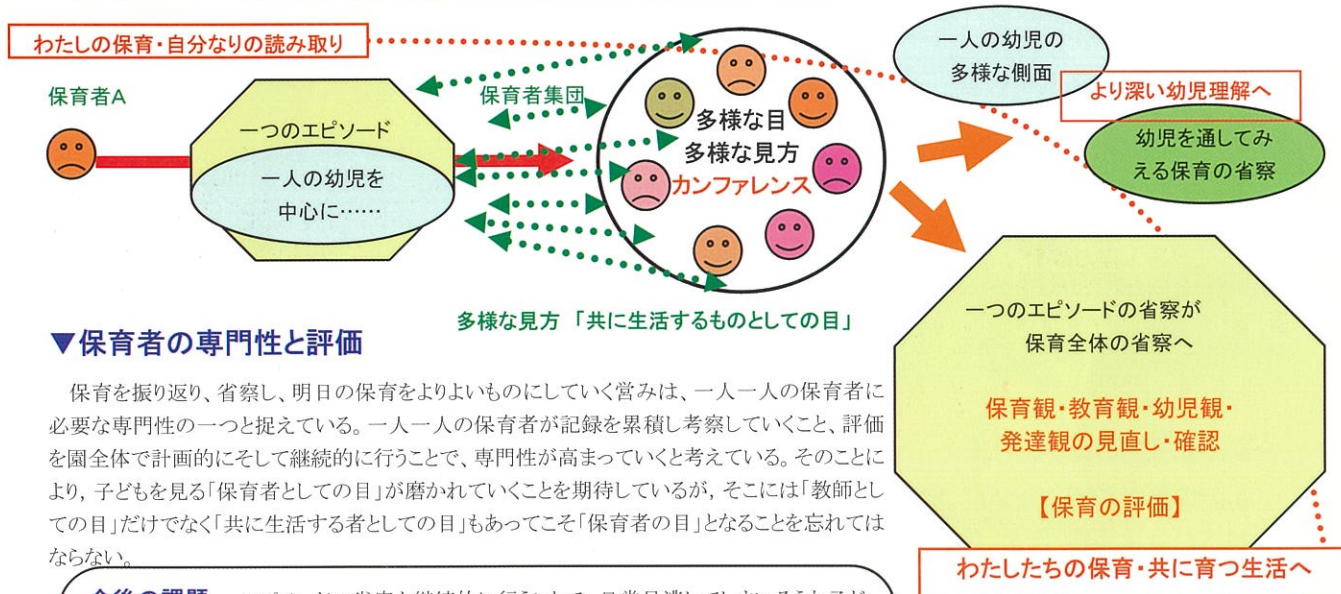
●行動・言動の詳細な記録だけではない記録 エピソードは具体的な保育の記録。しかし、事実を正確かつ詳細にとらえるだけでなく、それを物語る保育者の記述によって、幼児にとっての意味やできごとの背景、幼児を取り巻く関係性が見えてくるものであることを目指す。

●記録者の「目」を通した記録・かかわりの記録・評価の記録 保育の記録は保育者自身による「思い出記録」であり、幼児とのかかわりの記録でもある。その日、保育者の心に留まったできごとが、その保育者によって「切り取られ」、その保育者によって「語られる」もの。その保育者の保育観、幼児観、価値意識、あるいはその時の保育の課題などもそこには色濃く表れることがこの記録をとり続ける意味でもある。



●書き直すことの意味 エピソード記録は、記録者自身の保育のための記録から、読み手としての他の保育者に自分の保育を提示し、他の保育者と協議するために再度書き直す。その場にはいない者にも、状況が伝わるように、それまでのいきさつ、幼児の表情やちよとしたしぐさ、そこから推察される幼児の思い、その幼児をどう受け止めようかかわったのか、保育者の意図や思いなどもエピソードに書き込むようにした。この書き直しの過程でも、保育者は幼児の姿や、保育者自身の考え方を再考していくことになるが、それが次に全体でのカンファレンスや保育研究に提示され、共に保育を問い直すための資料となる。

▼保育を支える保育観・教育観・幼児観・発達観の見直し、確認～カンファレンスと省察



▼保育者の専門性と評価

保育を振り返り、省察し、明日の保育をよりよいものにしていく営みは、一人一人の保育者に必要な専門性の一つと捉えている。一人一人の保育者が記録を累積し考察していくこと、評価を園全体で計画的にそして継続的に行うことで、専門性が高まっていくと考えている。そのことにより、子どもを見る「保育者としての目」が磨かれていくことを期待しているが、そこには「教師としての目」だけでなく「共に生活する者としての目」もあってこそ「保育者の目」となることを忘れてはならない。

今後の課題 エピソードの省察を継続的に行うことで、日常見逃してしまいそうな子どもの言動や小さな変化を保育者が感じること、見取ることが大事だとわかってきた。ただ、エピソードについて話し合う際に、まだ気後れや気兼ねが感じられた。全員が気兼ねなく自分の考えを話すためには、自分自身を開くことができる話し合いの場の設定を工夫することが必要である。提示されたエピソードの、どの部分に視点を当てて話し合うか、またどのように一人一人の話を引き出していくかが課題である。

幼稚園でこのように「保育者の目」で子どもを捉え、子どもと生活しているが、小学校ではどうだろうか。幼稚園での評価のあり方を小学校へ伝えていくことも視野に入れていきたい。

問い合わせ先
秋田大学教育文化学部附属幼稚園
TEL・FAX 018-862-2343
e-mail:kinder@kg.akita-u.ac.jp

保育内容の再考 —幼稚園教育要領5領域のねらいを視点として—

埼玉大学教育学部附属幼稚園

▼「保育内容を再考すること」は評価の一方法である

▽保育の「評価」

保育の評価は、指導のあり方に対して行われるものである。幼児の姿を評価することにとどまらずに、以降の指導について併せて検討する必要がある。以下に示す一連の取組が、「評価」の一方法である。

▽研究の目的： 具体的な幼児の姿を事例として積み重ねることにより、幼稚園教育の「ねらい」がどのように実現されていくのかを明らかにする。

※保育内容とは： 幼児がどのような活動をしたかではなく、その中で幼児に何が育ったか、また教師は何を育てようとしたかという「ねらい」を指すものと捉える。

▼具体的な取組の方法

【日々の保育実践】

保育研究において重要なことは、保育に始まり、保育に還る研究であるという点である。保育における幼児の姿を丁寧に見取することは、実践の基本であると同時に、研究の基本でもあると考えている。

【視点の検討】

保育内容の基準である幼稚園教育要領5領域に示された各3つずつのねらいを視点とし、それぞれ次のように置き換えた。

人間関係	○ 個の充実 ○ 関係の充実 ○ 社会性の獲得
環境	○ 環境への興味・関心 ○ 環境の応用・工夫 ○ 事物への感覚
言葉	○ 自己表現としての言葉 ○ コミュニケーションとしての言葉 ○ 文化としての言葉

【事例の収集と検討】

視点とした「ねらい」を実現していると思われる具体的な姿を学級担任が年間記録する。期ごとに園内研修を行い内容を検討する。

平成16年度「人間関係」のねらいを視点として
平成17年度「環境」のねらいを視点として
平成18年度「言葉」のねらいを視点として
(「健康」「表現」は平成19年度以降順次の予定)
▽収集の翌年度に全体の分析をすすめている。

日々の保育へ還る

【教育課程の改善】

事例から捉えた「育ちの流れ」はそれぞれの視点で3年間の育ちを縦断的に捉えたものである。実際の保育では、縦断的な流れを意識しつつ、その時期の育ちを複数の視点から横断的に捉えることが必要である。研究で捉えた「育ちの流れ」を基に、各期ごとの具体的なねらい（保育内容）や指導方法を明確にし、教育課程へと反映させていく。

【ねらいを視点とした「育ちの流れ」の分析】

収集した事例の考察を基に、3年間の育ちの流れを見出す。まず、期ごと、又は複数の期に渡り、まとまりを捉えたあと、それぞれのまとまりを前後の時期との繋がりから検討する。

領域「環境」のねらいを視点とした育ちの流れ

3歳児	4歳児	5歳児
<p>3歳児 (4月～5月)</p> <p>環境への興味・関心 環境の応用・工夫 事物への感覚</p>	<p>4歳児 (6月～7月)</p> <p>環境への興味・関心 環境の応用・工夫 事物への感覚</p>	<p>5歳児 (8月～9月)</p> <p>環境への興味・関心 環境の応用・工夫 事物への感覚</p>
<p>事例1: 園庭での散歩</p> <p>事例2: 園庭での観察</p>	<p>事例3: 園庭での遊び</p> <p>事例4: 園庭での製作</p>	<p>事例5: 園庭での活動</p> <p>事例6: 園庭での発表</p>
<p>事例7: 園庭での発見</p> <p>事例8: 園庭での感動</p>	<p>事例9: 園庭での学び</p> <p>事例10: 園庭での成長</p>	<p>事例11: 園庭での達成</p> <p>事例12: 園庭での満足</p>

▼上図 領域「環境」のねらいを視点とした育ちの流れ

保育の「評価」を考える

佐賀大学文化教育学部附属幼稚園

1 保育の「評価」について

私達は指導計画に基づいて各期毎の計画や週案を立てて保育実践を重ねている。また、一人一人の幼児の様子を記録することで幼児理解を深め、次の日の日案や援助のあり方を工夫、改善し、翌日翌週の指導計画を見直している。このように「計画」→「実践」→「評価・省察」→「指導計画の改善」→「実践」・・・を繰り返していくことで幼児理解がすすみ、保育の質を高め、幼児の望ましい発達を促していくことができると考える。そのため各園の教育課程に基づいて保育者が自身の保育を振り返る「評価」の視点をもつことは、重要であろう。本園では、次のようなA・B・Cの視点を持ち保育の「評価」をし、指導計画の改善に生かしていく方法を試みた。

より明確な形で保育実践に生かせる「評価」のあり方を提案しようと考え、4歳児6月～7月のM子(期のねらいに照らし合わせて、その姿に顕著なズレが見られた幼児)を抽出し、短期の保育の「評価」(日案・週案)を実践した。M子を中心として日案を立てて保育実践を「評価」の視点で振り返り、次の日の日案に生かし、週毎にA・B・Cのそれぞれの評価の視点で振り返り、次の週への課題や保育者の援助の方向性を明確にし、評価を指導計画に生かしていくことを継続的に行っていた。

2 評価の視点と方法について

評価の視点について

A 個人への視点 B 個と集団とのかかわりの視点

日々の保育を「評価」のA・B・Cの視点で振り返る

M子の様子	保育者の援助	視点 A・B・C	視点
<p>1日遊んで、遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>M子の遊びの様子を、保育者が目録のメモに書き留めた。</p> <p>「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>視点A: 個人への視点 視点B: 個と集団とのかかわりの視点 視点C: クラス集団としての視点</p>	<p>A</p>
<p>遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>M子の遊びの様子を、保育者が目録のメモに書き留めた。</p> <p>「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>視点A: 個人への視点 視点B: 個と集団とのかかわりの視点 視点C: クラス集団としての視点</p>	<p>B</p>
<p>遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>M子の遊びの様子を、保育者が目録のメモに書き留めた。</p> <p>「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>視点A: 個人への視点 視点B: 個と集団とのかかわりの視点 視点C: クラス集団としての視点</p>	<p>C</p>

- a、興味を示す対象
- b、行動のしかた
- c、表現の仕方
- d、自己課題の持ち方
- e、生活行動の取り方

- a、自分の世界
- b、相手の世界
- c、周囲の人々とのかかわり

C クラス集団としての視点

- a、幼児の学級集団の育ち
(遊びへの取り組み・集団のつながり・生活への取り組み)
- b、指導内容と方法
(ねらい・内容・環境構成・教師の援助・家庭や地域との連携)

評価の視点A (a) (b) (c) (d) (e) 及びB (a) (b) (c) について1週間の保育を省察する

M子の様子及び省察	指導の課題	保育者の援助
<p>1. 3歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>2. 4歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>3歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>4歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>3歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>4歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>
<p>3. 5歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>4. 6歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>5歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>6歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>	<p>5歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p> <p>6歳児グループで遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。</p>

評価の視点C (a) (b) について、1週間の保育を省察する

C クラス集団としての保育評価の視点 (13日～16日)

a 幼児の学級集団の育ち

(遊びへの取り組み)
 集団の中で遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。

(集団のつながり)
 2～3人の気の合う仲間同士で遊ぶ様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。遊び終わってしまっている様子を見て、「もう一回遊んで」と声をかけてあげた。

(生活への取り組み)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

b 指導の内容と方法

(ねらい)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

(内容)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

(環境構成)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

(教師の援助)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

(家庭や地域との連携)
 プールでの水遊びをするための着替えは、何回か経験するようになった。着替えは遊びや生活の中で、自分で着替えるようになった。

評価の方法について

- (1) 手順について
 - A 個やクラスの実践の省察(評価の視点に照らし合わせて)
 - B 省察から指導計画の改善へ
 - a (日案→省察→翌日の日案)
 - b (週案→省察→次週の週案)
 - c 各期毎の計画・年間指導計画の見直し・改善につなげる
- (2) 方法について
 - A 担任と副担任とで保育を振り返って話し合う
 - B 保育カンファレンスで他の職員と協議する
 - C 研究会・研修会等で他園の職員と協議する
 - D 保護者へのアンケートを基に評価・反省する

3 まとめと今後の課題について

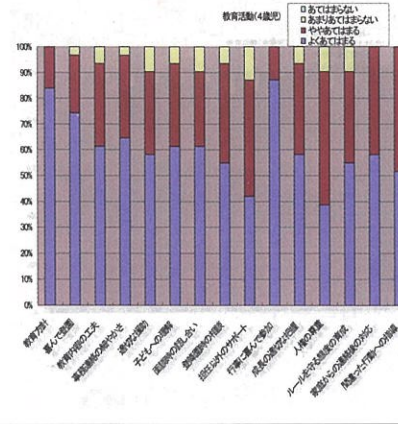
個と集団に焦点をあてた視点を持ち、保育の「評価」を進めていくことで個の幼児理解が進み、保育者自身が幼児を見る視点の偏りがあることなどにも気づくことができた。個の発達に応じた援助のあり方を改善・工夫し、幼児同士の人間関係やかかわりを配慮しながら翌日や翌週の保育計画に生かすことができた。個をよりの確に理解することができるこの視点は短期での保育の「評価」の場合、効果的であったといえる。

一方、長期的・継続的な評価の場合には視点が多くなることで、クラス全員の幼児について同時期に評価・省察したり、協議していくことは困難になってくるだろう。従って目的に応じて視点を絞っていくことや、見直していくことが必要であろうと考えられる。

また、私達幼児教育に携わるものの保育の「評価」と本園研究会への参加者や保護者などの外部評価のズレを少なくしていけるよう幼児の発達や育ちの共通理解をはかっていくことや、保育における「評価」のあり方を外部に対して発信していく必要性を感じる。

(参考文献: 保育ライブラリ「教育課程総論」小田豊・神長美津子編著書)

学期毎の保護者アンケートによる評価



問い合わせ先: 佐賀大学文化教育学部附属幼稚園
 TEL 0952(24)2745 FAX 0952(28)5882
 E-mail fuyo@ml.cc.saga-u.ac.jp

3つの視点から保育を捉える

～保育に生きるカリキュラム構成と評価～

山口大学教育学部附属幼稚園

保育の展開には、いつも保育者が子どもをどう捉え理解するかということが関係している。日々の保育において、子どもを理解し、かかわり、振り返る際の視点として、「個の安定と自立」「人とのかかわり」「環境とのかかわり」の3つの視点をもつことにした。この3つの視点は、保育者が日常子どもを見ていく際に用いる自然な視点である。3つの視点で保育を捉え、保育の計画・立案、保育実践、保育評価（省察）といった一連の保育活動に一貫して取り入れることで、計画から評価までに一貫性を持たせ、より系統的な保育を行いたいと考えた。

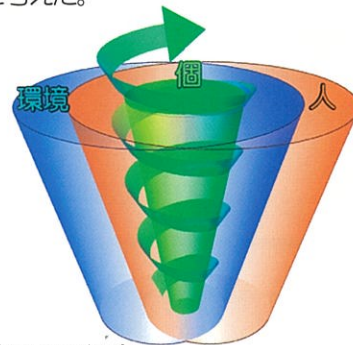
保育を捉える3つの視点

- 個の安定と自立
- 人とのかかわり
- 環境とのかかわり

人の発達を、個人が周囲の人や環境とかかわりながら、停滞・退行を含みつつらせん状に発達していく動態と考える。

この3視点は相互に関連しており、人や環境との豊かなかかわりを実現しながら「個の安定と自立」の内容を充実発展させていくことが、幼児の発達を実現していくことになり、それが幼稚園教育の目的となる。

子どもの発達理解をこの3角視点で検討することで、発達援助すなわち保育の方向性とその評価も3つの方向性で検討できる。



(1) 教育課程の編成

「個の安定と自立」「人とのかかわり」「環境とのかかわり」の3つの視点から教育課程を再編成した。

(2) 指導計画の見直しと再編成

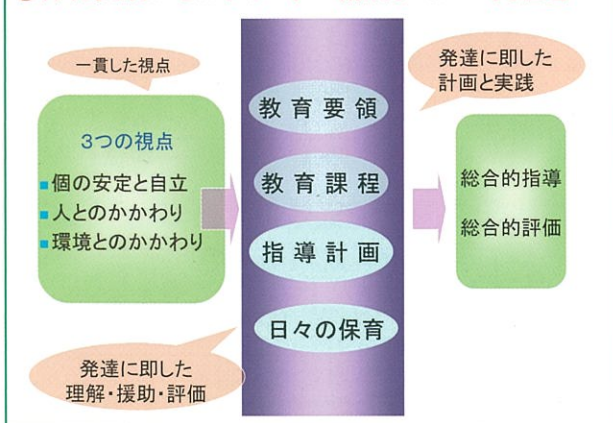
3つの視点での育てる方向を捉えるとともに、保護者の成長支援や幼小の連携も含みこんだ、現在の子どもに対応したものを作成した。

(3) 事例検討

子どもを理解し保育を振り返る際の共通の視点として、3つの視点をよりどころにして事例を検討した。子ども理解やかかわり方の検討を深めるとともに、教育課程や指導計画が子どもに即したものであるかを考察した。

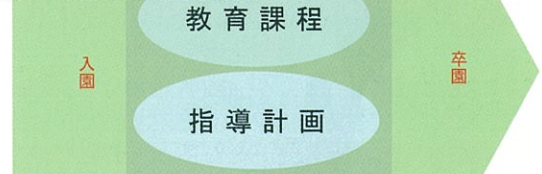
3視点によるカリキュラム編成

① 保育実践からカリキュラム編成までに一貫性を

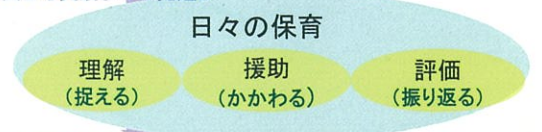


② 3つの見直しをもつ

① 入園から卒園までの育ちの見直し



② 計画から実践までの見直し



③ 日々の保育の見直し

3視点による事例検討の成果

- ① 保育の目指すところの共有化
- ② 保育を読み取る力の向上
- ③ 保育者の援助のあり方
 - ・援助の意味づけ、意識化
 - ・援助の方向性
 - ・発達の見直しをもつ
 - ・長期的に援助の重要性

【問い合わせ先】 山口大学教育学部附属幼稚園
〒753-0811 山口市白石3丁目1-2
TEL 083-933-5960 FAX 083-933-5961
<http://www.ymg-kg@yamaguchi-u.ac.jp>

遊びのなかの学び・再考

— 保育実践の評価を通して学びのありようを確かめる —

熊本大学教育学部附属幼稚園

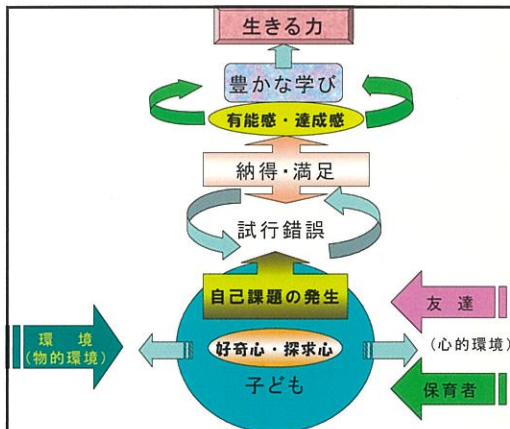
本園のえがく豊かな学び・生きる力

研究の概要

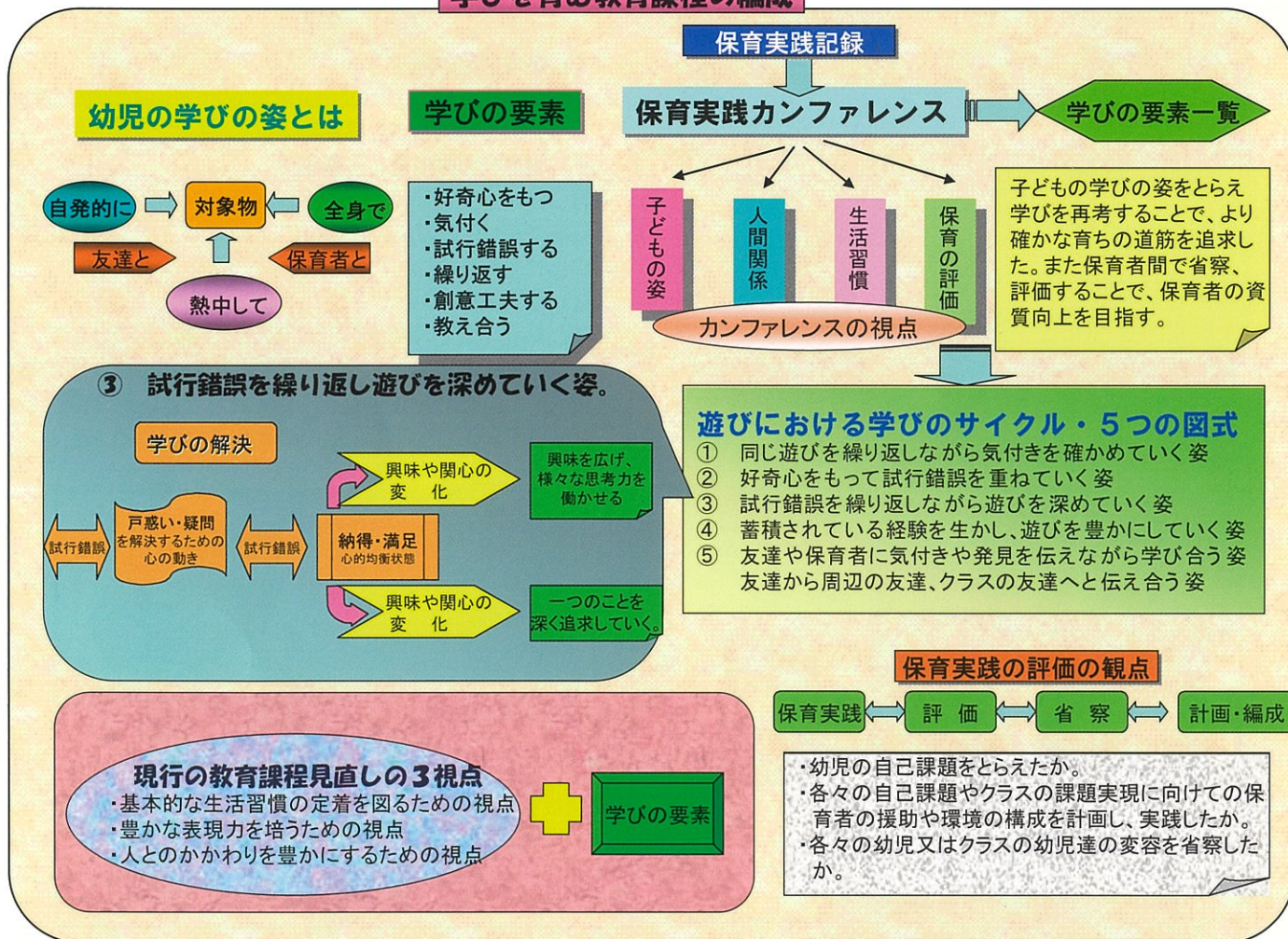
幼児は遊びながら、多くのことを学び、身につけ、友達とも学びを共有しあっている。一人一人の取り組みには「自己課題」を見いだすことができる。それらを明らかにすることによって、保育者の適時の援助や環境の構成を可能にすることになり、幼児にとって豊かな学びを得ることが期待される。そこで学びを育む教育課程の編成を目指すため、保育実践カンファレンスを通して研究を進めてきた。

保育実践の評価

- (1) カンファレンスをする：保育実践の記録と省察をする。保育者同士で保育実践を協議し合う。
- (2) 自己課題をとらえる：幼児一人一人の取り組みの観察や保育者の援助を通してその子の自己課題をとらえる。
：自己実現に向けての環境の構成と援助を熟慮し自己実現を図る。



学びを育む教育課程の編成



研究の評価と課題

- ・自己課題のとらえ方として保育者は「乗り越えなければならないこと」から「今一番、取り組みたいこと」への考え方の転換をはかり、幼児期は取り組んでよかったという達成感を体験させる。
- ・幼児が遊びながら豊かな学びを得るためには、友達と保育者が重要な要素であることがとらえられた。相互の受容関係の中で模倣、情報の享受、協調的な態度や心情からさらに自己課題へ膨らませ、よりよい変容に向かうようになる。保育の評価、省察を繰り返しながら豊かな学びへと向かわせ、生きる力の礎を築くことができると考える。

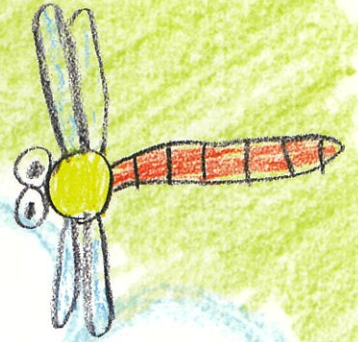
【問い合わせ先】 熊本大学教育学部附属幼稚園
〒860-0846 熊本市城東町15-9
TEL (096)352-3483 FAX (096)356-2433
E-mail yochien@gpo.kumamoto-u.ac.jp



コラム

子どもの視点に立った評価 秋田 喜代美先生

(東京大学大学院教育学研究科)



幼稚園は、幼児教育の質や水準を問い続け、子どもと保護者と保育者の健やかな育ちと幸せなくらしのために、日々の保育を振り返ることが求められている。自己評価、他者評価、第三者評価の合わせ鏡に、保育の姿を映し出す。日頃見えないものや見落としがちな姿を見えるようにする保育評価の方法や観点は、多様であってよい。そこに園のよさや独自性が現れてくる。幼稚園が社会において幼児教育のセンターとして重要な役割を果たしていることを示す説明責任(accountability)としての行為である。その責任と共に大事なことは、子どもたちの声や姿に耳を傾け、目をこらし、応答する責任(responsibility)である。子どもは保育や保育者を評価しない。保育者を信じ、保育を生き、育っていく。その信頼と姿に応えようと努めることが、評価の中核である。評価の形や結果のみに捉われず、日々の保育の中での子どもの経験と育ちを見つめ、振り返り、語りあい、熟考し、明日の保育へと生かす評価の過程を大切にしたい。その仕事の丁寧さにこそ、評価の質、保育の質が現れてくる。評価には、目標に照らし不足を捉える診断としての評価と、芸術作品を鑑賞するように各々の独自の価値や意味を捉える鑑識としての評価がある。二つのまなざしは評価の両輪である。子ども一人一人、子ども達、そして子ども達と保育者、子ども達と保護者にとっての経験の意味を読み解き、可能性を見出し、明日へとつないでいく。子どもの経験という過去の時間を今振り返ることで、明日をより創造的なものにしていくという時間をつなぐ行為である。そして、子どもと保育者の関係性、保育者同士の同僚性、保育者と保護者の互惠性という絆づくり、人をつなぐ行為でもある。評価は思い出から未来へと続くアルバム作り、園のアイデンティティー形成の過程であり、保育の希望を同僚、子どもや保護者と共に作り出す過程でもある。省察・評価をして終わりではなく、その省察が実践へと移される実践化が、新たな保育への始まりを創りだす。外から求められるのでやらなければならないものと捉えるのではなく、日々自らを新たに作る契機として評価を捉え、智恵を持って生かしていただきたい。

今後に向けて

- 発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の質を高めるための評価に取り組み、教育課程の改善に努めます。
- 家庭、地域社会との連携について、より一層努め、一人一人の幼児の発達を保障するきめ細かい評価を積み重ねることにより幼児の成長を支えます。



平成19年度 国立大学附属幼稚園研究一覧

19.1.29現在

	園名	研究テーマ	公開研究会等の期日(予定)
1	北海道教育大学 附属旭川幼稚園	特別なニーズを必要とする幼児の特性に応じた教育的支援 を考える ～共に育ちあう幼児の姿を求めて～(2年次)	19.10.13(土)
2	北海道教育大学 附属函館幼稚園	知の総合化への接続を意識して ～知的発達を深化させ接続を意識する～	19.10.20(土)
3	弘前大学教育学部 附属幼稚園	遊びを深める保育 ～環境を通して～	19.11.17(土)
4	岩手大学教育学部 附属幼稚園	学びの基礎を培う遊びの充実を目指して ～しなやかな心と体を育む遊びの環境を考える～	19.6月下旬～7月上旬
5	宮教教育大学 附属幼稚園	主体的にかかわる幼児をめざして	19.11.9(金)
6	秋田大学教育文化学部 附属幼稚園	共に育つ生活	19.7.3(火)
7	山形大学 附属幼稚園	豊かな遊びを育む	19.5.31(木)10.26(金)
8	福島大学 附属幼稚園	幼児の学びを考える	19.6.6(水)6.7(木) 11.16(金)11.17(土)
9	茨城大学教育学部 附属幼稚園	子どもの育ちを支える保育を考える(2年次)	19.11.21(水)
10	宇都宮大学教育学部 附属幼稚園	幼児期前期の発達と教育	19.6.20(水)
11	群馬大学教育学部 附属幼稚園	幼児の発達を支える保育の在り方を探る ～幼児の心をとらえる環境～	19.6.6(水)10.26(金) 20.1.26(土)
12	埼玉大学教育学部 附属幼稚園	保育内容の再考 ～領域「言葉」のねらいを視点として～	19.11.21(水)
13	千葉大学教育学部 附属幼稚園	ともに育つ幼稚園生活 ～遊びが豊かになる園庭を考える・2年次～	19.11.27(火)
14	東京学芸大学附属 幼稚園(小金井園舎)	心が動く 体が動く ～豊かな表現を生みだす～	19.12.8(土)
	東京学芸大学附属 幼稚園(竹早園舎)	主体性を育む幼・小・中連携の教育	20.2.16(土)
15	お茶の水女子大学 附属幼稚園	協働的な学びを育む	19.10.31(水)
16	山梨大学教育人間科学部 附属幼稚園	幼児期にふさわしい生活を考える ～今 必要な教育課程～	19.6.23(土)
17	新潟大学教育人間科学部 附属幼稚園	創造的な知性を培う ～遊びを通して、創造する喜びをはぐくむ保育をめざして～	19.10.16(火)
18	富山大学教育学部 附属幼稚園	子どもたちの関係性を育む教育課程	19.10.24(水)
19	金沢大学教育学部 附属幼稚園	幼児期の「学び」を探る ～社会的側面を通して～	19.6.6(水)10.13(土)
20	福井大学教育地域科学部 附属幼稚園	遊びのなかの学びを豊にする ～なかまと遊ぶ楽しさを通して～	19.11.3(土)
21	信州大学教育学部 附属幼稚園	遊び続ける子ども	19.10.27(土)
22	上越教育大学 附属幼稚園	幼児の生活と仲間関係 ～異年齢交流による保育を考える～	19.10.10(水)
23	静岡大学教育学部 附属幼稚園	共に育つ ～豊かな体験を通してつながる心～	19.11.22(木)
24	愛知教育大学 附属幼稚園	幼児の充実感を探る ～3年間の生活を通して～	19.11.15(木)
25	三重大学教育学部 附属幼稚園	今、必要とされる幼稚園とは ～幼稚園の役割を明確にした教育課程の編成～	未定

	園名	研究テーマ	公開研究会等の期日(予定)
26	滋賀大学教育学部 附属幼稚園	場に応じた行動のできる子をめざして ～自己制御に関連して～	19.5.31(木) 20.2.8(金)
27	京都教育大学 附属幼稚園	遊びの深まりと仲間作り ～環境づくりと援助～	なし
28	大阪教育大学 附属幼稚園	生活の中の学びと教師の援助について考える	19.11.10(土)
29	兵庫教育大学 附属幼稚園	幼児の生活を充実させる保育環境を考える ～子どもと共に育つ「親育てプログラム」の開発～	19.6.27(水)10.31(水) 20.1.23(水)
30	神戸大学発達科学部 附属幼稚園	子どもの学びからはじめるカリキュラム	未定
31	奈良教育大学 附属幼稚園	自尊心(かけがえのない自分を大切に思う心)を育む保育を 考える	19.12.1(土)
32	奈良女子大学 附属幼稚園	幼・小・中15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を 通して、独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する教育課程の開発	19.10.13(土)
33	鳥取大学 附属幼稚園	遊びの中の学びを探る	19.10.26(金)
34	鳥根大学教育学部 附属幼稚園	幼・小・中一貫教育カリキュラムの編制	19.10.27(土)
35	岡山大学教育学部 附属幼稚園	子ども自らがくらしを創る保育Ⅲ	19.11.7(水)
36	広島大学 附属幼稚園	幼児の自然体験について考える(2年次) ～「森の幼稚園」のカリキュラム開発～	19.11.15(木) 20.2.20(水)
37	広島大学 附属三原幼稚園	幼小中一貫の教育力を生かした社会のグローバル化・高度情 報化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション 能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの 研究開発(第4年次)	19.12
38	山口大学教育学部 附属幼稚園	子どもの育ちと教育課程(3) ～自然環境を生活に取り入れて～	19.11.2(金)
39	鳴門教育大学 附属幼稚園	保育の質を問う ～遊誘財が促す幼児期における体験の多様性と関連性～	19.11.29(木)
40	香川大学教育学部 附属幼稚園(坂出園舎)	子どもの育ちを支えるⅡ	未定
	香川大学教育学部 附属幼稚園(高松園舎)	遊びの中の学び	20.2.8(金)
41	愛媛大学教育学部 附属幼稚園	〈人間力〉を育てる幼・小・中連携教育の探求 ～カリキュラムの開発・編成～(2年次)	19.11.22(木)
42	高知大学教育学部 附属幼稚園	よく考えて行動する子どもを育む園生活のあり方	未定
43	福岡教育大学 附属幼稚園	小学校生活を見通した幼児期の遊びや生活のあり方の研究 ～幼児も親も教師も育つ教育課程・指導計画の編成～	19.2.6(水)
44	佐賀大学文化教育学部 附属幼稚園	幼児期の学びを拓く保育の創造 ～遊びや友達の中で育む かかわる力と自己肯定感～	20.2.11(月)
45	長崎大学教育学部 附属幼稚園	豊かな学びを育む ～言葉を通して～	なし
46	熊本大学教育学部 附属幼稚園	幼児の遊び つなぎ・広げ・深まる ～教育課程との関連性を探る～	19.5.25(金)10.26(金) 20.1.25(金)
47	大分大学教育福祉学部 附属幼稚園	幼児期の知的発達を支えるものは	19.10.27(土)
48	宮崎大学教育文化学部 附属幼稚園	かかわる力を育てる教師の援助 ～運動遊びの視点から～	20.2.1(金)
49	鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	他とよりよくかかわることを通して自分らしさを発揮できる 子どもの育成	20.2.9(土)



— 発行 —

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

— 事務局 —

山梨大学教育人間科学部附属幼稚園

〒400-0005 甲府市北新1-2-1 tel. 055-220-8320 fax. 055-220-8783

e-mail. kirinome@ccn.yamanashi.ac.jp

